

HEBO Project 全開！

～今、地域が動き出す。恵那・串原から～

岐阜県立恵那農業高校 HEBO 倶楽部

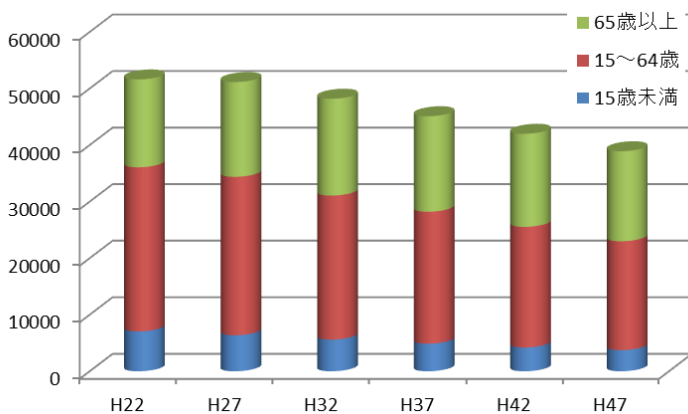
I. はじめに

1. 地域の概要

岐阜県の南東部に位置する東濃地域は、恵那市、中津川市をはじめ窯業が盛んな多治見市、土岐市及び瑞浪市からなる。この東濃地区東部（通称「恵那地域」という。以下恵那地域とする。）は、標高300から700メートル地帯に居住する中山間地域である。

恵那地域は、JR中央線を使うと名古屋から1時間程の位置であり、名古屋圏への通勤可能地域となってきている。また、中央自動車道や東海環状自動車道が整備され、交通のアクセスも良く、関東方面や関西方面からの交流人口も増えてきている。さらに2027年にはリニア新幹線の開通が見込まれ、隣接する中津川市に中間駅ができることから地域の観光開発に力が入っている。

しかし、地域の現状は全国各地で見られる中山間地域特有の少子高齢化の流れにあり、この恵那地域も同様である。



現在、恵那市では2016年度から「第2次恵那市総合計画」（5年間）を作成し、新たなまちづくりに取り組んでいる。「人・地域・自然が輝く交流都市 ～誇り・愛着を持ち 住み続けるまち～」をスローガンにし、「①まちの魅力を高める、②みんなでまちをつくる、③まちを元気にする。」の3つを柱に取り組んでいる。

そこで、私たちも地元恵那市の魅力を高め、私たちの活動をとおしてまちづくりに貢献して地域が元気になるような取組を検討することにした。

(1) 地域の特産品

東濃地域は中山道という街道があるものの四方を山に囲まれ閉鎖された空間の中で独自の食文化を形成してきた。そのために、「栗きんとん」をはじめ、「五平餅」、「芋が餅」、「からすみ」、「菊ゴボウの味噌漬け」などがあり、どちらかという豪華なイメージはなく、素材を生かした食文化を形成しているといえる。

地域特産品として有名な「栗きんとん」や「五平餅」は既に商品化され、デパートに出店した和菓子店や観光イベント等で販売されていることから全国的にも有名であると思われるが、その他のものは他地域に知られることはなく、当地域で親しまれている郷土料理である。中でもへぼは特殊であり、当地域を代表する食文化であるが、消滅が危惧されている。

「へぼ」とは、スズメバチの一種でクロスズメバチを指す。この蜂を食する文化が古くから存在しているのである。かつて昆虫を食する文化は全国各地に存在していたようである。中山間地域であることから新鮮な海産物が手に入りにくい時代には貴重なタンパク源として利用していたようである。一般的には、食べるものがないから食べていたと言われるが、決してそうではなく、「美味しい」の一言に尽きる。つまり、「へぼ」は山菜や野生の鳥獣同様に自然の恵みをうまく取り入れた豊かな食文化であったと考えられる。特に、へぼはキノコと同様に秋の味覚として取り入れられ、「松茸」級の高級な食材として位置づけられている。

へぼという呼び名は、恵那地域内の一部での呼び名であり、姿や行動様式から様々な名前では呼んでいる。諸説あるが、巣に入る直前で這うように低空飛行することから「ハイバチ」、高い羽音で飛ぶことから「タカブ」、これ以外にも「スガレ」、「ドバチ」、「アカクイ」などがある。「へぼ」についてはその語源は定かではない。しかし、私たちが実際にへぼを飼ってみて感じたことは、クロスズメバチは他のスズメバチに襲われて餌食になることが多く、その力関係が余りにも弱いのでこの地方の方言「へばい＝弱い」からなったと考えている（私説）。

(2) へぼ追い文化

へぼは、秋の代表的な味覚である。この美味しさの虜になった人は秋になると朝早くから「へぼ追い」に山へ出かけていく。人より早く行き、人より早く見つけるのである。「へぼ」との対決の前に、他人との駆け引きから始まるのである。へぼ追い人（以降、「へぼハンター」という）は山に入ったことが他人に悟られないように慎重に山に入っていく。水たまりを除けながら車でポイントまで進んでいく。水たまりに入ると水が濁り、既に山に入っていることが他人にわかってしまう。へぼハンターはそれくらい慎重になっているようである。

エサのあれこれ ハンターのこだわり

へぼハンターは山に入って餌場を設置することから始める。エサは地域によって異なることがわかった。それにはこだわりがあるようだ。

付知地区では、林道に沿って餌を 20 から 30 個所程所設置していくのである。一定間隔で餌を設置することによりへぼを招きやすくするのである。ハンターたちは「長い線状のトラップ」をかけ、その上空を往来しているへぼを残らず呼び込む作戦である。それには「ウグイ(川魚)」が最適だと言う。冷凍で保存していたウグイを解凍し、輪切りにした切り身を枝に吊るしていく。「この匂いにつられてへぼがやって来る。」と言う。このウグイは夏の川釣りで準備しておくようである。へぼ以外の趣味で得た



ものを利用する人や、秋にヘボと交換する約束で漁を楽しむ仲間から分けてもらったりしている。ここでも地域のつながりがみられる。

それに対して多数派なのは「生イカ」である。地元恵那串原や足助（愛知県豊田市）では「これしかない」という。これまでいろいろ試した末、「カエルの代用は「生イカ」しか考えられない」と言う。しかし、生イカは購入することとなるので餌代が発生しているのが課題である。その為、エサの設置方法が付知地区とは異なる。串原ではヘボ追いを行う周辺に10箇所程度設置してその周辺でヘボ追いを行う。「小さな線」である。また、足助地区では山の状態を見ながら尾根筋に直線的に設置することで両方からのヘボを獲得しようとする工夫がみられる。

これ以外にも鶏肉で行う人やこれまでの定番「カエル」、昆虫もありだと言う。誰もが、「昔はカエルを使ってヘボを追った。カエルは最高だけどカエルを捕る時間がないことから今はやらない。」と口をそろえて言う。しかし、時間がないことを理由にしているが、本当だろうか。疑問に思える。彼らの少年時代はお金や人脈で餌を調達する手段がなく、なんでも自分たちで用意するには「カエル」が最高だったのではと思われる。

ヘボがおびき出される ヘボ追いのスタート

餌場にやってきたヘボは顎で噛み切って肉団子を作り、脚で持ちながら巣へと運んでいく。見事である。自分の持ちやすい大きさにし、収まると巣へ一直線である。ハンターたちはヘボをじっと観察し、ヘボが飛び立つとスタートボタンを押す。すると雑談が始まる。「2分経過…。3分経過…。」タイムを計測している。何をしているかと近寄ってきみるとヘボが帰ってくるまでの時間を計っていたのだ。

近いと判断すると、早速ヘボ追いがスタートする。ここでチーム内の役割分担化が進んでいる。餌付けは専属でヘボに肉団子を持たせることを担当し、ヘボの飛び方を見て肉団子の大きさや目印の長さを判断する。この「持たせ」が重要である。肉団子が大きかったり、形が悪いとヘボが嫌がるのである。また、肉団子に目印を結び付けているので、ヘボが違和感を感じると糸を切って目印を外そうとするのである。最初はもって飛んだとしても目印があることで風の抵抗を受けやすく、目印が風に揺れたりすることで肉団子に変な振動が伝わるとヘボは途中の枝に寄り、糸を切ろうとする。ヘボの好みに合わせてやる必要があるのである。ヘボは気持ちよく飛ぶと同じ餌場に帰ってくる。持たせがうまいとよく通ってくれるのである。

追い手（勢子）は見印を頼りにヘボの行方を追う。1回目は餌場から飛ぶ方向を見通し、その付近から行き先を追う。ヘボの飛ぶ速さについて行き、地上へ着陸する位置を探る役目である。以前は、野山を駆け巡り、躍動感あるヘボ追いのシーンを見ることができたが、今ではその姿は見られない。なぜならハンターたちは年々年を重ね、高齢化が進んでいるので肉体的に無理なのである。その体力をカバーするのがこれまでの経験と通信機器なのである。経験からヘボの軌道を予測し、そのポイントまでをヘボのルートをトランシーバーで連絡するのである。その情報を共有しながら「今、行ったぞ！ 右側を3メートルの高さで移動した。」「了解、確認。3本目のヒノキの太い左枝下を通過した。」「了解、確認。黒い枝の下に入った。」といった具合である。このようにポイントまでの情報をトランシーバーで共有しているのでチャンネルを合わすと様子を知ることができる。

巣の入口を確認したらマークを付けて次に移動である。これをひたすら繰り返すのである。

昼はしばし休戦 午後から掘り出し

ヘボは気温の上昇とともに外に出かけていく活動が鈍るようである。そこで、仲間と昼食をとる。昼



食と言ってもおにぎり程度である。以前なら、ここで「鶏ちゃん」で楽しい食事といった所である。裏山でヘボ追っていたころとは様子が変わってきている。今は車で遠征してのヘボ追いなので準備が大変である。ヘボ追いは活動場所が変わり、深い山に入っていくことが増え、その食事スタイルも変化してきていると教えてもらった。

夏の「巣の掘り出し」と秋の「巣の獲得」

夏の「巣の掘り出し」と秋の「巣の獲得」は意味合いが違う。夏に掘るのは巣を育てるため、秋に巣を掘るのは中のヘボを食するためである。すると掘り方が違ってくる。

夏に掘るのは巣を育てる目的なので神経を使って掘り出します。外被膜（巣の外側）を壊さない用に周囲を十分掘ってから巣を取り出します。巣は土中の空間に作り始めることから土中の根を支持体として活用しています。その為に根を切ってから取り出さないと巣が壊れてしまいます。

外被膜の色は材料としている植物の色が反映されます。赤い樹皮を使って作られたものは「アカス」と呼ばれます。それに対して笹場などでは白っぽい【シロス】と言われています。周りをきれいにしていよいよ取り出す。この時に「移送箱の中で巣が水平を保つことが大切である。」とハンターたちは口をそろえて言う。水平が保たれないと女王蜂が嫌がって巣作りを放棄するらしい。ハンターたちは巣箱に入れてから女王に逃げられた経験からいう。

水平に巣箱に入れてもすぐに持ち帰らず、巣のあった場所でふたを開けて待機するのである。思わずハンターに聞くと「帰ってくる働きバチを入れている。」と答えが返ってきた。つまり、一匹でも多くの働きバチを持ち帰ろうということである。しかし、疑問がわいてきた。「このままだと巣の中にいる蜂も出てくるのではないか？」その疑問をハンターに聞くと、巣を刺激した時点で巣の中は緊急事態になって警戒態勢の待機状態になっている。刺激がなくなると偵察部隊が状況確認に出てくることがあるので弱い振動を与えて警戒態勢を取らせておくようである。そしてその間に帰還するものは巣に入っていく。あるところを見計らってふたをして終了となる。しかし、面白いものである。帰還する蜂は私たちに刺そうとしないのである。餌を持っているからなのか、材料を持っているからなのかかわからないが、自分たちの役割を果たすために意識があるのか攻撃してこない。むしろ、巣から飛び出してくるヘボに気をつける必要があるのだ。とはいっても安全確保のためには防護服は欠かせない。専用の防護服を着用することを忘れてはいけない。

秋の獲得はどうか。これは食べるためなので生で掘らない。煙幕を使って巣の中にいるヘボを気絶させて活動が鈍っているうちに一気に掘るのである。外被膜はその場で壊して巣盤のみを取り出し、外被膜は巣穴に入れて土をかぶせてしまうのである。どうもその外被膜を戻すことで気絶から覚めたヘボはその付近をうろうろするようである。刺される心配があるのでその場から私たちは直ぐに立ち去ることとなる。掘り出した巣盤からはこの時しか体験できないご馳走を口にすることができる。「生ヘボ」を巣盤から取り出して口に入れてみる。なんともクリーミーで美味しい。これが食べたくて病みつきになる美味しさである。私たちもおそろおそろ口にヘボを運んでみたが「美味しい！」という感想以外は思い浮かばなかった。

ヘボ抜きは根気と集中力

ヘボ抜きをやったことがある人は人後も思わず慣れた手つきでヘボを抜き出す。それも早く抜き出すことができる。しかし、慣れない私たちは緊張しながらピンセットでつまみ出す。力加減がわからないので強く引き出す。すると大切なヘボがつぶれて中から体液が漏れる。失敗である。これを繰り返しな



から 1 時間、自分の担当する巣盤をようやく抜き終えることができる。慣れた人は雑談しながらヘボ抜きをするが、私たちは話す余裕などない。必死である。細かい作業で大変ではあるが、この後に待っているヘボの味を楽しみに頑張ることができるのである。

抜き出したヘボはすぐさま甘露煮にする家庭が多い。新鮮なヘボをすぐに煮て味付けをしたほうがおいしいと言う。甘露煮にして貯蔵するのである。この甘露煮を使ってヘボ飯を炊くと格別なのである。



2. これまでの取組

私たちは、平成 27 年度から「ヘボ文化」に興味を持ち、ヘボ文化をとおした交流を行う中で組織が高齢化し、次世代への継承が課題であることを認識することができた。

そこで、私たちは平成 28 年 4 月に「HEBO 倶楽部」を結成し、「ヘボ」の愛好家団体と連携しながらのその活動をとおして体験した内容を情報発信することにした。

私たち高校生は、ヘボ追いはじめ全てが初心者であるので高齢化の進んだ愛好家の皆さんに一から指導していただき体験を行ってきた。愛好家の皆さんが指導者として活躍されることで会として活動がマンネリ化するのではなく、元気が出る考えたのである。また、高校生が取り組むことで話題性が高まり、メディアに露出する機会が増えると地域での話題提供になり、興味関心がわく人が増えると考えた。そこで、①地域での連携、次世代への継承を目指した②小学生等への紹介、③全国発信である。

(1) 具体的な取組

①地域での連携活動

実際に付知 BBC (Black Bee Club) の皆さん、全国地蜂連合会の皆さんと「ヘボ追い」、「巣掘り」を行い、実際にヘボを飼育して自分たちの食材を確保した。そして、体験したことを校内新聞や SNS を活用して紹介することにした。校内新聞は 15 号まで発行し、SNS では行事ごとに投稿した。

また、地域のヘボコンテスト等の行事にスタッフとして参加し、イベントの運営等に関わることでイベントを盛り上げた。

②小学生等への紹介

あいち海上の森センター（愛知県瀬戸市）や自由の森学園（埼玉県飯能市）において小学生などの子どもたちを対象にした「ヘボ抜き体験」を実施し、ヘボが食材であることを紹介し、その味を楽しんでもらう「食体験」を実施した。

また、地元において農業の最大イベントである「ひがしみの農業祭」に企画展として「HEBO Project 展」を企画し、展示や商品案内を行った。そして、地域食材であるヘボの理解を深めるためにクイズラリーを企画して小学生にヘボ文化に触れさせる企画を実施した。

③全国へ発信

東京大学癒しの森研究所（山梨県山中湖村）において 10 月に東京大の学生ゼミが実施されているのでそのゼミに参加した。ゼミでは、恵那地域の食文化紹介およびヘボの体験を実施した。また、全国から集まっている大学生が対象となることで全国への発信が可能となった。同世代の大学生に体験させることで今後の昆虫食文化の理解者を増やすことにつなげることができた。

また、平成 28 年 11 月に岐阜県全域で開催された「全国農業担い手サミット in ぎふ」の恵那地域情報交換会において伝統食であるへボ食文化の紹介を行い、実際に育てた「へボ」を食材として提供することができた。

以上のことからへボについての活動をとおして地域交流、地域の活性化、情報発信によるへボ文化の普及ができたと考えている。

(2) 新たな課題

前述したようにへボ追い、巣掘り、飼育と付知 BBC の皆さんと一緒に体験してきた。大変奥深いものであった。へボも通い始め、9 月まで順調であったが、へボはそんなに甘くはなかった。

無防備の「へぼい奴」はやられる。－初の挫折－

自然界の中で「クロスズメバチ（以降、へボという）」と「キロスズメバチ」の力関係をはっきりと見ることができた。餌場で肉団子を切り取っているへボが、後ろから飛んできたキロスズメバチに捕まり、そのままキロスズメバチの巣へ持ち帰られる。餌となるのだ。私たちにとって敵であるキロスズメバチは餌場に頻繁に現れるようになる。とても危険だ。こいつに刺されたら大変なことになる。とても緊張した状態が続く。しかし、キロスズメバチはもっとしたたかであった。へボが肉団子を持って巣に帰るのを尾行していたのである。巣が攻撃されるなんて思っていなかった。私たちの認識不足である。油断していた。

秋になり始めたある日、巣箱の周辺にはキロスズメバチが群がっていた。中には巣箱に入り込んでへボを持ち出すものまでいる。

「もう駄目だ。」

餌を与えて飼育することはリスクが高かったのである。普段から巣箱についていられるわけではないので寄ってきたキロスズメバチを退治するのに限界がある。キロスズメバチは社会性が強い昆虫なので集団行動をする性質から餌場と認識されると集団で一気にやってくる。巣箱が餌場であると認識されると大変危険である。

私たちは今後のことを考えると自然飼育（餌を与えない方法）を選択したほうがよいという結論になった。しかし、もう手遅れであった。巣箱の中の巣は完全にやられてしまったのである。へボがへぼい奴ではなく、私たちがキロスズメバチに負けたのである。

3. 昨年度の提案

(1) 田舎力甲子園 2016 への参加

そこで、恵那地域の特徴的な食文化である「へボ」に注目し、「HEBO」をキーワードに全国へ情報発信をして地域活性化の一助になるよう活動した内容を田舎力甲子園 2016 に応募した。

活性化のアイデアは、①小学生に対してイベント会場でへボ抜き体験を実施し、興味をもってもらうことである。②Facebook や ameba ブログ、Twitter など SNS の活用である。今後は、これまでの活動 DVD を再編集して You Tube の利用である。③地域イベントについては全国地蜂連合会と情報を共有して私たち「HEBO 倶楽部」か



らの情報発信に努め、また、関係観光協会への情報提供を行うことである。④継続的なマスコミへの除法提供が必要であり、⑤へボまつりへの積極的なかわりりと防護用の面布を参加費と含めて受付で販売し、会場の参加者から活動協力金を集めて運営費に充てる方法の提案である。⑥商品開発については、和食と洋食、菓子といった分野において積極的な開発が必要である。最後に⑦へボのオーナー制の導入により資金調達とイベントによる地域交流の期待を提案した。これらが実現できるように先輩から託された。

(2) 日本地理学会春季学術大会への参加

田舎力甲子園 2016 にて賞を頂いたことをきっかけに自分たちの調査活動をまとめて日本地理学会の春季学術大会高校生ポスター発表大会に応募した。ここでも「へボ文化」の紹介を行い、私たちが活動の中で実施したアンケート調査の結果から地域の思いや期待することをまとめて発表した。

参加された大学の先生から「面白いテーマである。ぜひ体験をしながら調査を続けていって欲しい。」と励ましの意見をいただいた。地域のニーズがあること調査研究としても話題性があることがわかった。

会場内で多く聞かれた意見は「どこを見てもこの情報が見つからない。」とか「もっと発信していく必要があるのでは」である。「へボ文化」をさらに情報発信するためには拠点作りが必要だと考えた。そこで、資料館建設はとても大切であると実感した。アイデアを出し合いながら、とにかく「小さくても良いので資料館を造ろう！」と思ったのである。



Ⅱ. 市長への表敬訪問、チャンス到来！

1. 表敬訪問

田舎力甲子園 2016 にて賞を頂いたことを小坂恵那市長に報告する機会をいただいた。HEBO 倶楽部は新たな展開を期待してこの表敬訪問に望むことにした。

「ヘボ文化」をさらに情報発信するためには拠点作りが必要だと考えた。そこで、資料館建設を検討することにした。アイデアを出し合いながら、とにかく「小さくても良いので資料館を造ろう！」これを提言することを目指して準備を進めることとした。



平成 28 年度の HEBO 倶楽部は表敬訪問を実施することができた。

市長訪問当日は、受賞した研究（アイデア）の紹介を紙芝居形式で実施した。小坂恵那市長から「高校生が地域と連携して大切なヘボ文化を継承しようとしている事は素晴らしい！」と言って頂けた。そして「オーナー制の提案は新たな取組。若い人のアイデアは斬新である。ぜひ地域に伝えて欲しい」と感想もあった。

そこで、このチャンスに私たちから市長さんへの提言をする事になる。まさにチャンス到来である。

「ヘボ文化の拠点として資料館の建設を検討して欲しい！」思い切って部長が発言した。しかし、この場

では「おもしろい意見ですね。」と笑顔で終わることとなった。

「失敗か？」私たち HEBO 倶楽部は落胆の色を隠せなかった。

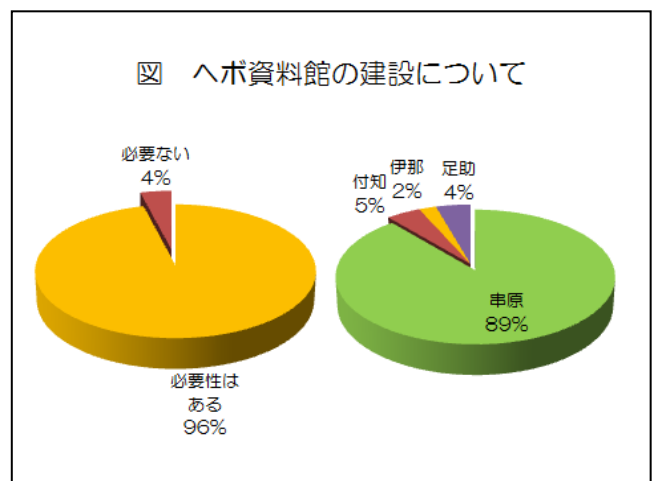
一転して資料館建設へ

数日して恵那市役所の農林部林政課から担当の先生に連絡が入った。「資料館の話をも具体化して行きたいので話が聞きたい」とのことである。そこで、これまでの経緯を説明し、今後の検討を始めることになった。2 代目の HEBO 倶楽部が新メンバーで活動することになった瞬間である。

2. 資料館建設に向けた取組

(1) 現状の調査

まず、地域に必要性があるかを調査することにした。これまで交流や連携活動で知り合った恵那市役所の職員、恵那市観光協会、恵那市商工会議所、串原振興事務所、全国地蜂連合会の役員の皆さん、串原へぼ愛好会の皆さんに質問した。すると 96% の人が「ヘボ資料館」は必要と回答している。また、場所については「恵那市串原がよい」とほとんどの人が回答していることから恵那市串原を候補地とすることが望ましいと考えた。しかしながら、運営や建設資金の調達など課題が多く、ほとんどの人が「現実には不可能」と回答している。

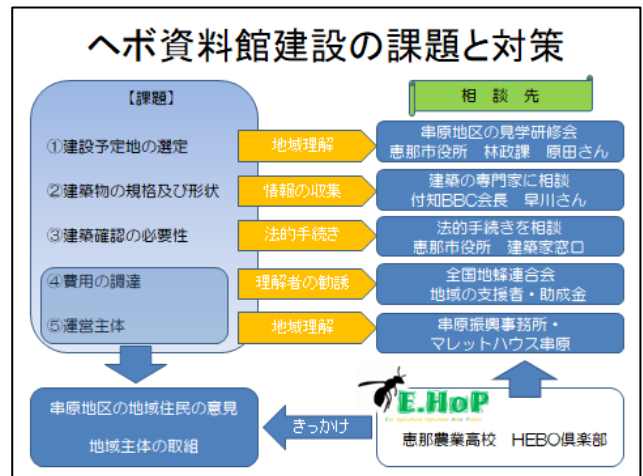


やはり、建設費が大きな問題で、この問題に直面すると二の足を踏んでしまっている。そこで、私たちができることを整理し、現状を踏まえて建設計画を検討する事にした。

(2) 課題の整理

資金調達するには、まず何が必要かを整理することにした。串原振興事務所長の三宅勝彦さんに相談すると別記の問題点があることが分かった。建設予定地については、現地を知ることが必要であると考え、串原地区見学会を実施することにした。また、規格と形状については恵那市林政部の原田さんに相談することにした。そして、建築確認の必要性などについては恵那市役所建設部の窓口で確認することとした。

最大の問題である費用については先送りし、運営主体については今後検討することにした。



①建設予定地

そこで、「串原研修」を実施し、串原の主要な場所を見学してみた。候補地として、NPO 奥矢作レクリエーションセンター、中山神社、郷土資料館、マレットハウス串原などを候補に挙げて検討してみた。

アクセスや駐車場の有無、集客可能かどうかなど地位的条件と展示スペースを確保できるかについてそれぞれ検討してみた。総合的に判断するとマレットハウス串原付近がよいという結果になった。



表 ヘボ資料館建設予定地の比較

| | 奥矢作レクリエーションセンター | 中山神社 | 郷土資料館 | マレットハウス串原 |
|-----------|-----------------|------|-------|-----------|
| ●地位地条件 | | | | |
| ①アクセスはよいか | ○ | ○ | ○ | ◎ |
| ②駐車場 | ○ | ○ | ○ | ◎ |
| ③集客は可能か | ◎ | △ | ○ | ◎ |
| ●展示スペース | | | | |
| ①実物展示は可能か | ◎ | ◎ | △ | ○ |
| ②建物は可能か | × | × | △ | ○ |
| 総合評価 | × | × | △ | ◎ |



②建築するには規格及び形状について

私たちは自然の中での景観に配慮したデザインがよいと考えた。そこで、ログハウスのような形状の木質の倉庫にしたいと考えた。インターネットで検索してイメージ図を作成し、建築関係の仕事をしてみえる付知 BBC 会長の早川利廣さんに相談した。すると東濃地域内で校倉造りの倉庫を取り扱って

る業者を紹介していただいた。付知町の田口建設さんでは簡易キットで建設できるようにプレカット方式で作成できることがわかった。三浦さんのデザインした校倉造りの倉庫キットは、材料がプレカットしてあるので現場でカットしたり、加工したりする必要がないのである。柱の溝に板を入れてボルトで占めると壁が出来上がるスタイルである。これなら私たちでも簡単に建設できるというメリットがある。早速採用して実際の検討に入った。

そこで、中津川市付知町内の業者に連絡を取って打合せをすることにした。設計については三浦八郎さんと相談し、大きさについては規準規格である(2,400mm×3,600mm)として設計に入った。



③建築確認の必要性

恵那市では新築する家屋については建築確認が必要であることがわかった。その為には設計士の作成した図面や申請書の作成など手続きが必要であること、その申請と確認するための諸費が必要であることがわかり、誰にやってもらうのか、どのように費用を捻出するのが課題となった。

④費用の試算

設計依頼をしてみずは見積をして頂くことにした。すぐに回答があり、およそ60万円程度の見積となった。これに運送費や基礎の経費などが必要となり、この事業に100万円程度は必要だという試算ができた。私たちにとって100万円を集めることは不可能である。そこで、資金調達を進めるためにも地域の理解を求める必要性が出てきた。

⑤運営主体

運営主体は、串原へぼ愛好会の皆さんにお願いし、恵那農業高校 HEBO 倶楽部が定期的に情報を更新したり、展示を変えたりする案を提示した。施設は治安のことを考え、マレットハウス串原で鍵の開閉など協力体制が必要であることがわかった。

(3) 建築のための意見交換

建設するには地域の理解が必要であることから、地域の代表に集まってもらい、建設の検討をして頂くこととした。昨年度までの私たちの相談窓口であった三宅勝彦さんは退職されたので串原振興事務所長の平林憲雄さんに 地域の代表者会議を開催して頂いた。



代表者会議の参加者は、全国地蜂連合会副会長の三宅明（串原）さん、串原へぼ愛好会会長の堀武治さん、恵那市農林部林政課の原田宏明さんと青年部代表の三宅大介さんである。まずは、これまでの経緯を説明し、本校のプランを提示してみました。私たちのプランは賛成してもらえると信じていた。

「こんなちっぽけな資料館ならいらない。」

地元の皆さんからの意見としては「地元産の建材、地元業者を使って作る事が絶対である。」という既成概念があり、それを取り込んでいない HEBO 倶楽部の意見は却下された。

しかも、大きさが小さいので「観光客ががっかりする。」「変なものを作ると直すことができないのでしっかりした物が欲しい。」と厳しい意見が私たちに突き付けられた。前回までの三宅振興事務所長と市役所農林部農政課の原田さんと進めてきた話が見事に否定されたのである。

そして、全国地蜂連合会の意見として代表からは、「事務局として利用するなら水回りと電気が最低限必要。」であるとの意見が出てきた。

さらに、青年部代表からは、「国際化に対応した資料館にすべきである。」との意見が出た。「今、欧米ではやっていることはリフォームである。現在の倉庫を改装して造った方がよい。」と私たちの提案は見事に不採用となったのである。

「私たち HEBO 倶楽部は今回の企画から離脱します。」

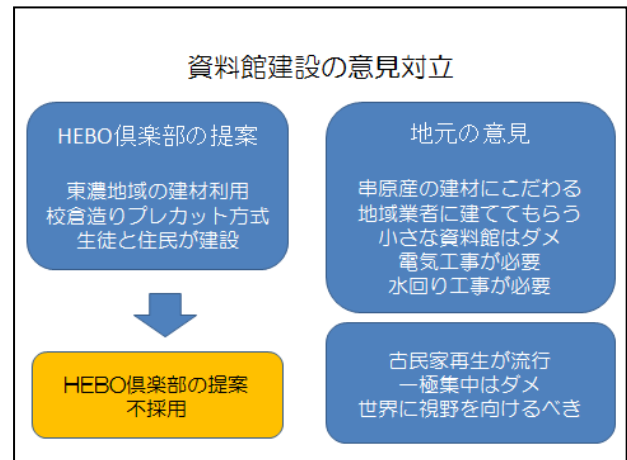
私たち HEBO 倶楽部は今回の提案の不採用により、この事業から離脱することにした。全否定されたことは残念であったが、地域の方が積極的に自分の意見を主張し、主体的な行動をすることとなったので、今回の私たちの行動が地域を動かすよいきっかけとなったと考えることとした。建設について関わらなくなったのは残念であったが、一石を投じることができたことと納得し、あきらめることにした。

(4) 地域が主体の新体制

地域主体の建設と運営へ大きく舵を切り、新たな体制でこの事業を行うことになった。運営を予定していた串原へぼ愛好会も自分たちが運営主体となることに全会一致という結論がでなかった。そこで、へぼ資料館実行委員会を設立して検討する事になった。なお、今回から HEBO 倶楽部は不参加となり、顧問の先生はアドバイザーとして参加することとなった。

① 実行委員会設立

実行委員会には、元 NPO 法人奥矢作森林塾理事長の大島光利さん、恵那市議会地元選出議員の堀光明さん、まちづくり振興会代表の安藤仁志さん、串原田舎じまんの会代表の堀雪子さん、マレットハウス串原専務の三宅勝彦さんを加えてスタートした。会長には全国地蜂連合会副会長の三宅明さんが就任した。今回集まった人は地域を代表するメンバーである。これに検討委員会のメンバーが加わった。まさに最強のメンバーである。これでへぼ資料館の建設は一気に進むと信じて疑わなかった。



へぼ資料館建設実行委員会の設立



☆会長
三宅 明（全国地蜂連合会事務局）
大島光利（元NPO奥矢作森林塾理事長）
堀 勝治（串原へぼ愛好会 会長）
堀 光利（恵那市議会議員）
安藤 ○
三宅勝彦（マレットハウス専務・元振興事務所長）

堀 雪子（串原田舎じまんの会代表）
三宅大輔（地元青年部代表）
平林 （串原振興事務所長）
原田宏明（恵那市役所農林部林政課）

②第1回実行委員会の実施

これまでの経緯を進行役の平林振興事務所長が説明した。HEBO 倶楽部が恵那市長へ提案したことがきっかけとなったこと、これまで検討委員会で検討してきた内容についてである。そして、地域住民主体での実施となったことや当初は串原へぼ愛好会が運営主体となる事を検討していたが、辞退されたことなどである。

次に、三宅明実行委員長から建設予定のへぼ資料館の規模や見積の説明があった。このまま決定すると検討委員は疑わなかった。

「計画がずさんすぎる。資金確保が大丈夫か？」

会場から意見が出た。「これは無理！」

「なぜ、ここにきて恵那農高の生徒が参加しないのだ。」「自分たちだけでやることに意味はあるのか。」と建設の趣旨に納得しない実行委員や、「建設する資料館の図面が不正確だ。これでは試算できない。」などと事務局に対して厳しい意見が出た。

さらに、「いくらかかるかわからない事業をやる人はいない。」「早く、専門家に依頼して設計図面を描いてもらう必要がある。」などもっともな意見である。

しかし、そのための費用がないので次の段階に進めないのが現状である。「試算できなければ資金集めもできない。」紛糾した。少し冷静になって考えることにした。

参加者からは「今使える助成金はあるのか？」とか「資金不足なら来年度にして市の予算に提案した方が良いのでは」という意見がでて実行委員会は中断した。

問題点を整理し、建設費用や初年度の運営費などを含めると 200 万円は必要でないかということとなった。参加者から、「慌てて建設するのではなく、助成をねらって大きな資料館を建設する準備を進めてはどうか。」という意見で会は結論が出た。事実上の中止である。

この実行委員会の話を顧問の先生から聞くことになる。なぜ、できないのか。納得ができないという思いで一杯である。

Ⅲ. 地域で活動するには

事実上の「ヘボ資料館」建設中止は私たち HEBO 倶楽部にとって残念なものとなった。しかし、私たちはあきらめきれなかった。そこで、私たちのプランの完成度が低いから認められなかったと考えなおし、ブラッシュアップしていくことにした。また、修正した案を理解してくれる賛同者のネットワークを作ることにした。

「あきらめきれない！ 私たちが何とかする」

私たちの地域課題研究室では、これまでの地域連携活動をとおして恵那市観光協会、恵那市商工会議所、地元優良企業の社長などとの交流があることを思い出し、先生に相談した。先生から「趣旨が大切である。あなたたちの思いを正直に伝えてみよう！きっと活路は見いだされる。」と助言して頂いたことから、事業目的と効果を整理することにした。

恵那市のまちづくりの中から私たちが取り組めることを考えると、①自然を守り、自然を生かす。②歴史・文化を生かす、③まちの担い手になる、④様々な担い手がつながる、④交流と連携で元気になる。などがあげられた。



地域を活性化するには 活動の理解者を増やしてつながる

これまで、全国に向けて情報発信をすることが地域活性に繋がると考えていたが、どうも違うような気がし始めてきた。そこで、地道ではあるが地域の中で地域文化の大切さを理解してくれる人を増やし、情報発信をすることが必要と考えた。

具体的にはこれまで以上に地域理解を深めるための現地研修を行い、地域の魅力を発信することにした。そして、ヘボ文化の情報発信の拠点づくりと地域の人々の理解を深めるための文化講演会の実施、さらには商店街の空き店舗を利用した情報発信である。

1. 文化講演会を企画する

私たちの活動趣旨を理解してもらうために、地域の食をプロデュースし、地域農業を元気にしようとしている企業を探すことにした。すると、全国に先駆けて有機栽培のモヤシを生産し、全国的にも珍しい野菜である「チコリ」の生産と加工を手掛ける「ちこり村」の宮川支配人さんと出会うことができた。

私たちの伝統食に対する思いをプレゼンテーションするとこの活動に賛同してくださり、協賛していただけることとなった。文化講演会の協力者の誕生である。

どんな内容にするのか

講演会のターゲットはヘボ愛好家の皆さんとこの文化を理解してファンになってもらう一般の参加者を設定した。それぞれの立場でニーズは異なるが、企画する側として目的を設定した。専門家はより専門の知識や新たな人とのつながりを期待していると考えた。一般の人はとにかく興味関心がありそうな

人にヘボ文化を理解してもらい、この活動をきっかけにしてヘボをやってみようと感じてもらえたら最高である。

そこで専門的な知識が得られるように研究員の佐賀さんに生理学的な見地からの発表とし、立教大学の野中先生には世界から見た日本の昆虫食と題して文化的側面から発表してもらうことにした。

また、食べることに限っては料理研究家の上村先生にヘボの料理について発表してもらい、女性層や若い世代にも興味を持ってもらえるようにした。そして、私たちは新たな仲間づくりのための意見を發表させていただくことにした。

いつがいいのか？会場はどうするのか？

実施時期は、ヘボシーズンが終了して落ち着き、師走の声が聞こえるまでの間で考えると11月末が候補日となった。秋のイベントが終盤を終え、一段落する時期である。この時期なら本校の農高祭で最終呼びかけができるので会場への参加者を増やすことができると考えた。

次に、実施場所であるが、人が集まりやすい会場を検討することにした。しかしながら、この時期の土日に開いている公共の施設はなく、体育館での実施なども考えたが、駐車場の問題から不可能な状況になった。

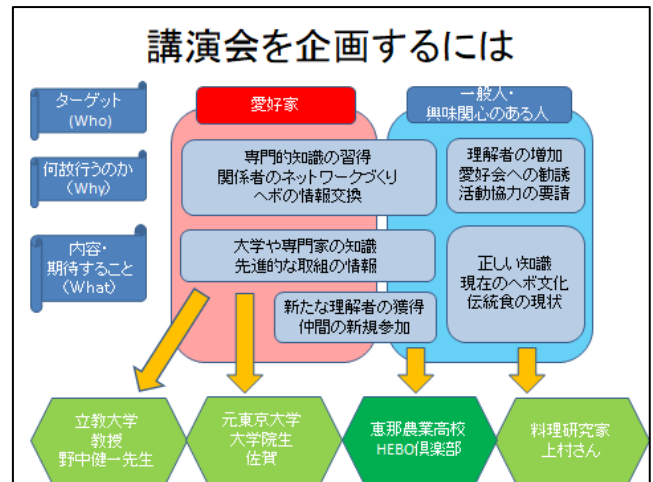
そんな中で倶楽部員の一人が、「ちこり村で打ち合わせをした際にセミナー室があったよね。あそこは使えないのかなあ」と発言し、そこに一縷の望みを託すことにした。

ちこり村の宮川支配人とイベント担当の水野さんにお会いし交渉することにした。「講演会の開始時間を13時とし、ちこり村の「ばあーばーずダイニング」での昼食の案内をするので会場を貸してほしい」といった内容で相談してみた。PR用のポスターやチラシに案内を載せる条件でちこり村のセミナー室（200人収容）の使用許可をお願いしてみた。すると「素晴らしい取り組みである。地域の伝統食を守ることは大切である。ぜひ協力させてほしい。」と、快く承諾していただけた。これで会場は確保できた。

また、宮川支配人から「やってみたいことは何でも相談して欲しい。自分たちでできないと決める前に相談することで良い方法が見つかるかもしれない。」と積極的な意見をいただいた。私たちは力強いサポーターを得ることができた。そして、帰り際に「イベントを成功させるには感動と共感が必要。このイベントでどんな感動や共感を得られるかを考えてね。」と宿題をいただき、現在もアイデア出しをしている。

講師の依頼については学校へ戻り、顧問の先生から企画書を校長先生に提出していただき、許可をもらうことができた。現在は大学の先生に交渉中である。（事前の口頭での了解はいただいた。）どんなテーマにするかがこの会の成功のカギにぎるので現在も検討している。

後は、協賛していただける関係者への交渉を夏休みに実施し、その後ポスターの作成をはじめの予定である。また、参加者の確認や当日の運営について事務局としての役割を HEBO 倶楽部のメンバーで分担することにした。



ヘボ文化講演会の実施に向けて



2. ヘボ資料館の建設に向けて（再び）

私たちはさらなる理解者を求めて、これまで連携事業でお世話になった事業所等に説明に行くことにした。恵那市内の経済界の協力を得ることにした。元恵那市観光協会の会長の鎌田 満（恵那川上屋会長）さん、元恵那市商工会議所会頭の山田基（マル五鐵構会長）さん、元岐阜農林高校の原隆男校長先生らに顧問の先生に紹介してもらい、説明してみたのである。

ヘボ文化を残すべき～私たちの活動に新たな理解者登場～

少しずつではあるが私たちの活動を支援してくれる人がつながりだした。すると新たな支援者が現れることとなった。それは地元を代表とする食品スーパー「パロー」さんである。パローホールディングスの創始者である伊藤喜美さんが設立した「伊藤青少年育成奨学会」に声が届いたのである。多くの人に呼びかけた結果、「ヘボは大切な文化である。地域振興支援事業として協力していきたい。」と賛同していただけることとなった。資料館の建設に向けて再始動である。

今回、事業を実施しようと考えた時に、地域での理解が得られていないことを痛感した。また、担当地域の利害関係がある人と一緒にプロジェクトを遂行しようとする「どうせやるなら県や市から助成をもらってしっかりしたものを作ろう」と派手な事業になってしまい、資金がたくさん必要になることも分かった。そこで原点に戻って、その目的と効果を整理し、わかりやすく説明して活動を支援して下さる仲間を得ていくことが大切だと実感した。誰かに建設してもらおうと思うと資金の心配をしないで最高なものを求めてしまう。器が大切ではないのである。そこで、自分たちの目的を達成することができる最低限のものからスタートする「身の丈にあった事業」で良いと思った。この趣旨を理解してくれる支援者を一人ずつ増やすことが大切なのである。その結果、資金が調達出来たら大きくしていけばよいのである。

再度、実行委員会を開催してもらい、私たちの思いを語った。小さな資料館からスタートし、地域の声を大きくして資金調達を行い、資料館を拡大していく方法である。この2段階方式で建設することを提案した。このアイデアは実行委員会ですべて理解され、建設の方向で進み始めている。

3. 空き店舗を利用したヘボ文化の紹介

私たちは市の中心地である駅前商店街に人を呼び込むために空き店舗の利用を恵那商工会議所の後藤さんから依頼を受けた。これは情報発信のチャンスである。そこで、空き店舗を利用して何ができるかを検討することにした。

本来の依頼内容は駅前商店街の活性化である。しかし、JR駅前の中心地で「ヘボの文化」の紹介ができると考えればよいチャンスである。平日はヘボの資料館として見学できるようにし、週末には期間限定で「HEBO Café」をオープンしてみてもどうかと考えている。

そのためにはメインとなる商品開発が必要である。そこで、恵那商工会議所の後藤さんから紹介していただいた「kasumi」さんとの共同開発によるスイーツやヘボのイメージ商品の展開を検討し始めた。新たな商品開発は簡単にできないが、私たちの活動を理解し、支援してくれる人の輪が広がっていている。

今後は、ヘボの文化講演会に向けて商品開発をすすめていき、発表できるようにしていきたい。そして、来年度には販売に結びつける予定である。商品化がうまくいけば、恵那市観光協会の直売所である「えなてらす」さんに商品を供給して「ヘボのお土産」によるヘボの文化発信に関わっていきたい。

IV. 最後に

この地域の抱える課題は人口流出と高齢化であり、衰退の傾向がみられるのはヘボ文化だけではない。串原地区についてみても、「地歌舞伎保存会」、「県無形文化財の中山太鼓」も後継者不足の問題は残る。

私たちは「ヘボ文化」という切り口で地域を見てきたが、あくまでも点としてとらえているだけである。今後は点と点をつなぐことを考えていく必要性を感じている。私たちはこの点と点を結ぶ役割を担っていくコーディネーター的な存在が必要であると考えている。

以前顧問の先生から聞いた「トーマスクック」を思い出す。彼は、近代の旅行業における様々なシステムを開発してきた人である。彼の功績は、団体旅行のための団体旅券（団体格安料金）の確保や共同運航方式、オプションルツアーの設定など現在の旅行業界に数多く残っている。また、田舎でのホテル確保のために富豪の家での民泊などを先駆けて行ってきた。まさに旅行業界のイノベーターである。参加者の不満解消の取組は、消費者ニーズが満たされるので彼の旅行を再度利用したいと思う人が多く、信頼される旅行会社となっていたのである。彼の成功は単なるビジネスとして営利目的で実施していたのではなく、禁酒運動というイベントを展開して参加者のニーズを満たしていたにすぎないのである。禁酒運動という目的を達成する大義名分を背負い、個人の利益を求めなかったから成功したと言われている。この生き方から学ぶものは多いと改めて感じている。



いま、「ヘボ文化」は一部の人が残したいと感じているに過ぎない。しかし、この地域に必要なのは自分の地域のことや自分の利益ではなく、「私たち市民にとって必要なものであるという魅力」を共有することである。この魅力を共有し、自分たちの手で守るという気持ちが大切である。競い合う（足を引っ張りあう）のではなく、共存・共有できる関係を市民全体で構築していくことである。

私たちは、これからも地域内で魅力を発信し、皆さんに興味関心を持ってもらう活動を続けていきたい。そして、地域のニーズを満たすためのコーディネーターとしてアイデアを出し、元気なまちづくりにかかわっていきたいと考えている。卒業後は地域に残り、地域を愛し、人と交流しながら元気なまちづくりの担い手になっていきたい。これから10年後にはもっと素晴らしい恵那市になっていることを信じて第1歩を確実に歩んでいきたい。

